

研究ノート 杜甫「雑述」訳注

著者	荒井 礼
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	77
ページ	78-87
発行年	2019-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00157141

杜甫「雑述」訳注

荒井 礼

解題

杜甫の「雑述」は孔巢父・張叔卿について述べる。この二人は人柄も良く才能もありながら、社会的に不遇な状態にある。杜甫はその理由を述べて激励する。

制作年は未詳だが、従来次の二説がある。

①開元二十八年（七四〇）、杜甫二十九歳の作とする説。

この時、孔巢父は李白らと共に徂徠山に隠れて「竹溪の六逸」と称されていた。このころ、杜甫は齊・趙（本文中の「山東」に当たる地方）を遊歴中で、兗州司馬（兗州は、魯郡に当たる。「魯之張叔卿」の注も参照）となった父を見舞いに行き、そこで孔巢父らと交遊し、

「雑述」を贈ったとする（林継中「杜文繫年」『漳州師院学報』一九九五年第三期。陳冠明・孫憐婷撰『杜甫親眷交遊行年考』上海古籍出版社、二〇〇六）。

②天宝五載（七四六）、杜甫三十五歳、長安での詩作「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」（『杜詩詳注』卷一）と同時期の作とする説（劉開揚「杜文窺管続篇」『柿葉楼存稿』、上海古籍出版社、一九八三）。なお、何寄澎氏も「送孔巢父云々」詩と同時の作としているが、詩・文ともに天宝六載の作としている。何氏は文中に見える岑参と薛昶が天宝六載には共に長安にいたことを一つの根拠としている（林宗正・蔣寅編『川合康三教授栄休紀念文集』鳳凰出版社、二〇一七）。

吉川幸次郎氏も早期の散文だとするが、制作年は明記していない（『杜甫詩注』第一冊、筑摩書房、一九七七、二九六頁）。本訳注では②の説に従い、孔・張の面前で贈ったものとして解釈する。

「述」について、明・徐師曾『文体明弁序説』に、
按ずるに字書に云う、「述は、譏なり。其の人の言行

を纂譚〔集め選び、記録〕して以て考を俟つなり」と。
其の文状と同じ。状と曰わずして、述と曰うも、亦た別名ならん。此の体諸集に見ゆる者多からず。

とある。人物の徳行を摘出して述べるという性質は「状」と交わらないので、「述」と言っても「状」の別名であろうと言う。右に指摘されているように、「述」という名で作られる文章自体が珍しいものであったので、「述」は唐以降に始まったとする説もある。劉開揚氏の「杜文窺管統篇」に引かれる民国初・呉曾祺の『文体芻言』に、

其れ用いられて文の一体と為る者は、古に是の称無く、亦た是の作無し、唐以後に始めて見^あわる。

とあり、三国時代の邯鄲淳の「魏受命述」は、ある人物の権威付けのため、功績を褒め称えることに主眼が置かれる「符命」というジャンルに属し、記述を主とするジャンルでは無いと述べる。何寄澎氏は、「述」は「頌」・「説」・「序」としても用いられ、韻文で書かれることもあるとし、陶淵明の「読史述九章」なども「述」体と見なしている。そして、杜甫の「雑述」・「秋述」に至って「述」は顕著な発展を見せ、他人に贈る「贈序」の性質を有し、個人の情がより鮮明に述べられるようになったとする。何氏の言うように、杜甫の「述」は二篇共に人物称賛・説得の文章と

なっている。杜甫の詩文における「述」字の用例を見ても「称述」(「奉謝口敕放三司推問状」)「詳注」(卷二十五)と熟していたり、「謬称三賦在、難述二公恩」(「奉留贈集賢院崔于二学士」)「詳注」(卷二)と互文になっていたりする。

「雑述」は、前半が散文となっており、後半(本訳注第三段)が韻文となっている。散文部分は典故と対句が用いられ、後の韓愈らの復古文よりは六朝時代の駢儷文を思わせる構成になっている。全体的に用いられる典故は、儒家に関するものが多い。こうした儒家の言葉を借りて人を論ず方法は、孔子の「述べて作らず」といった態度を体現しようとしたのではないだろうか。

本訳注の体裁は『中国文化』第七十六号の谷口匡氏の訳注に準拠する。底本、及び、校勘に用いたテキストとその略称は谷口氏の訳注を参照。

訳注

(一)

杜子曰、凡今之代、用力爲賢乎、進賢爲賢乎。進賢賢乎、則魯之張叔卿・孔巢父二才士者、聰明深察、博辯閎大、固必能伸於知己、令聞不已、任重致遠、速於風馳也。是何面目黧黑、常不得飽飯喫、曾未如富家奴、茲敢望縞衣乘軒乎、

豈東之諸侯深拒於汝乎、豈新令尹之人未汝之知也、由天乎、有命乎。

杜子曰く、凡今の代、力を用うるを賢と為すか、賢を進むるを賢と為すか。賢を進むるを賢とするや、則ち魯の張・叔卿・孔巢父の二才士は、聡明深察、博弁闊大にして、固より必ず能く己を知るものに伸べて、令聞已まず、重きに任じて遠きを致すこと、風鷗よりも速やかならん。是れ何ぞ面目の黧黒なる、常に飯喫するに飽くを得ず、曾て未だ富家の奴に如かず。茲に敢えて縞衣して軒に乗るを望まんか、豈に東の諸侯の深く汝を拒まんか、豈に新令尹の人の未だ汝を之知らざるや、天に由るか、命有るか。

杜子が言う。さて今の世の中、己の才覚を揮う者を賢者と言うのだろうか、それとも賢者を推薦する者を賢者と言うのだろうか。賢者を推薦する者を賢者とするならば、魯の張叔卿と孔巢父、この二人の才人は、聡明で洞察力に優れ、博識雄弁で物事をしかと弁別できる者たちなので、自らの主張を聴いてくれる人物には忌憚のない意見を主張することができると、評判はあがる一方で、つむじ風よりも速やかに重要な任務を成し遂げるであろうことは、もと

より誰の目にも明らかである。それなのに、なぜ二人の面貌は病人のように土気色で痩せこけているのか。いつも充分な食事にすらありつけず、その生活は富豪に仕える従僕となることを望んでいないのか、はたまた、山東の刺史が貴君らを遠ざけているのか、あるいは、宰相殿も最近就任したばかりであるゆえ、張君と孔君のことをまだご存知でないのだろうか、それとも、これは天がそうさせているのか、そもそも人にはどうすることもできない運命なのか。

杜子 杜甫のこと。自らを「予」と敬称で表すのは、自身を客体化したもの。文章が寓言性を帯びる。

凡今之代 「凡今」は二文字で、「今」の意。『詩経』小雅・常棣に、「凡今の人、兄弟に如くは莫し」とある。

「代」は「世」字に同じ。唐の太宗李世民的諱を避けた。

用力 自分の能力を揮うこと。力を尽くすこと。

進賢 有能な人材を推薦すること。「用力」・「進賢」の二

句は、『孔子家語』賢君篇に見える。「子貢 孔子に問い

て曰く、『今の人臣 孰れか賢と為す』と。……子曰く、

『賜や、……汝、力を用うるを賢と為すと聞か、賢を

進むるを賢と為すか』と。子貢曰く、『賢を進むるは賢

なるかな」と。子曰く、「然り」と。この文は、『説苑』臣術篇にも見える。

進賢賢乎 仇本・朱本は「進賢爲賢」に作る。この語の出

典の一つである『説苑』は「進賢爲賢」となっている。

魯之張叔卿 魯郡（今の山東省兗州）の人。嶺南（今の広

東から広西チワン族自治区のあたり）節度判官に任ぜられ、後に事に坐して桂州（広西省チワン族自治区）に流

された（底本注に拠る）。杜甫が成都にいたころの詩作

に「得広州張判官叔卿書使還以詩代意」（『詳注』巻十）

がある。朱鶴齡の案語には、「史にいう、孔巢父、少く

して韓準・李白・裴政・張叔明・陶沔と、徂徠山に隠れ、

竹溪六逸と号すと。此に張叔卿と云うは、豈に即ち張叔

明ならんや」とある。底本は朱説を否定している。

孔巢父 字は弱翁。冀州（現在、河北省に属す）の人。開

元年間、李白らと共に徂徠山（山東省泰安県の東南）

に隠れ、「竹溪六逸」と称された。天宝中、長安で職に

就いたが大した実績も無いままに病氣と称して帰り、江

東を遊歴した。安史の乱中、永王璘が江淮で挙兵した時、

永王は孔巢父の噂を聞き、幕下に招いた。しかし、巢父

は永王が必ず敗れることを見抜いて身を隠した。後、予

見どおりとなったので、彼は名を知られることとなった。

『旧唐書』巻一五四・『新唐書』巻一六三に伝がある。

聰明 道理に明るく、察しが良いこと。杜甫の「送率府程

録還郷一詩」（『詳注』巻五）に、「程侯晩に相遇い、与

に語れば才傑立つ。薰然として耳目開き、頗る覚ゆ聡、

明の人なるを」とある。「聰明深察」の語、孔巢父が永

王の招聘を断った事とよく合致する。

深察 細微まで見通せること。洞察力に優れることを言う。

博辯 博識で物事を細かく説き分けることができるこ

と。弁舌に優れることを言う。『旧唐書』孔巢父伝に、

「孔」巢父博弁多智なり、田悦の衆に対して、逆順利

害君臣の道を陳ぶ」とある。「博辯」、錢本・朱本・仇

本・張本・全唐文は「博辯」に作る。

闊大 「広大」に同じ。内容が豊富で計り知れないこと、

ここでは雄弁であることを言う。

聰明・博辯の二句 『史記』巻四十七・孔子世家の文に基

づく。「聰明深察にして、死に近づく者は、好んで人を

議する者なり。博辯広大にして、其の身を危うくする者

は、人の悪を発く者なり。人の子為る者は、以て己を有

すること母かれ。人の臣為る者は、以て己を有すること

母かれ。「聰明」・「博弁」は、他人の善悪を批評できる

ほどの洞察力と、悪事を暴き立てるだけの雄弁さと解釈

できる。『史記』の「以て己を有すること母かれ」とは、「人の子たるもの、臣下たるものは、自分のことを顧みずに行動するものだ」という解釈と、「聡明」・「博弁」が過ぎると己の身を危うくするので、「己（自己主張）」を持たぬほうが良いという処世訓を説いたとする解釈がある。

伸於知己 君子は己を理解してくれない者には態度を卑屈にして何も言わないのだが、己を理解してくれる人には自分の志を陳べて能力を発揮するということ。『史記』卷六十・管晏列伝に見える言葉。晏嬰は囚人であった越石父の罪を贖つて共に帰ったが、晏子は礼を尽くさぬまま、奥に引つ込んでしまった。すると、越石父が交わりを絶ちたいと申し出たので、晏子は驚いて、「何故こんなにも早く絶交したいと申すのか」と訊ねた。そこで越石父は言った、「然らず。吾聞く君子は己を知らざるものに誦して己を知るものに信ぶる者なりと。吾の縲（せう）の中（獄中）に在りしときに方たりては、彼我を知らざるものなり。夫子の既己に感寤して我を贖うは是れ己を知ればなり。己を知るものにして礼無きは、固より縲縲の中に在るに如かざるなり」と。『史記索隱』に、「信は読みて申と曰う」とある。

令聞不已 「令聞」は立派な誉れ、優れた評判。『詩経』大雅・「文王」に、「臺臺たる文王、令聞、已まず」とある。「令聞」、朱本・仇本は「令問」に作る。意味は同じ。

任重致远 本来は、馬が重い荷物を引いて遠くまで運ぶことを言った。そこから、重責に堪えて、事業を成し遂げることには喩える。有能な人材について言う『墨子』親土に、「故に賢君有りと雖も、無功の臣を愛せず。……是の故に其の任に勝えずして其の位に処るは、此の位の人に非ざるなり。……良馬は乗り難し、然れども以て重きに任じて遠きを致すべし。良才は令し難し、然れども以て君を致して尊を見すべし」とある。謝本は、この語が『論語』泰伯篇の「士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」に基づくものと解釈している。「任重道遠」は、任務（＝仁）は重く、それを実践する道は死ぬまで続く遠大なもの、という意。

面目黧黑 顔がやつれて土気色をしていること。『列子』黄帝篇に、「子華の門徒は、皆世族なり、縞衣して軒に乗り、緩歩して闊視す、顧つて商丘開の、年老い力弱く、面目黧黒にして、衣冠不檢なるを見て、之を眴らざるは莫し」とある。「不檢」は、規則に適っていないこと。見栄えが悪いこと。

常 朱本は「嘗」に作る。

飽飯喫 食事に困らないこと。「飽」は満足する、十分に「する」。「飯」は食べる、「喫」は飲む。なお、「飯喫」

は二文字で食事の意に解することもできる。仏教関連の書に見える口語。「飽飯喫」と熟して読み、「飽きるほど十分な食事」と解することもできる。熟語としての用例に、「目連 仏の明教を承け、……広く盂蘭盆の善根を造れば、阿嬢 此の盆中に就きて、始めて一頓の飽飯喫を得たり」（大目乾連冥間救母變文並図一卷）、潘重規編『敦煌變文集新書』巻四、天津出版社、一九九四、七一―四頁）がある。「広」は「多」、「阿嬢」は母親、「頓」は食事の回数を数える量詞。「飽飯喫」、錢本・全唐文は「飯飽喫」に作る。錢本は細字注に「一作飽飯喫」とあり、仇本の細字注には「一作飽飯喫」とある。

曾未如 全唐文は「曾未得」に作る。

富家奴 富豪の家の従僕。

縞衣乘軒 「縞衣」は白絹で作った衣服。男子の衣服。ここでは動詞として読む。「乘軒」は大夫の車に乗ること。

役人になることを言う。「面目黧黑」の注を参照。

東之諸侯 山東（華山〔陝西省華県〕以東）の刺史を指す。

杜甫「送顧八分文学適洪吉州」〔詳注〕巻二十二に

「子東の諸侯に干め、勸勉して縦恣を防がしむ……使臣 扱ぶ所を精にし、徳を進めて歴試せしめんことを知る」とあり、詳注に、「侯とは乃ち州の刺史なり。……使臣の二句、言は、觀察（刺史）は民の為に官を扱ぶ、必ず能く有徳の者を進めて之を歴試せしむるなり」とある。詩に言う「東」とは、江西省洪州のこと。「雜述」中の「東の諸侯の深く拒む」というのは、山東の長官が張叔卿（解題①の制作年なら孔巢父も）を郷貢進士として選抜しないことを言う。現在の長官に人材を見る目が無いこと、しかと觀察の任に当たっていないことを暗に風論している」と解することもできる。

新令尹之人 宰相になつたばかりの人。

由天乎、有命乎 人の一生は天命によるから、人間にはどうにもできないのであろうか、という問いかけ。『論語』顔淵篇の「子夏曰く、『商之を聞く。死生命有り、富貴天に在りと』に拠る。

（二）

雖岑子・薛子引知名之士、月數十百、填爾逆旅、請誦詩、浮名耳。勉之哉、勉之哉。夫古之君子、知天下之不可蓋也、故下之、知眾人之不可先也、故後之。嗟乎叔卿、遣辭工於猛健、放蕩似不能安排者。以我爲聞人而已、以我爲益友而

已。叔卿靜而思之。嗟乎巢父、執雌守常、吾無所贈若矣。

岑子・薛子と雖も知名の士を引くこと、月に数十百にして、爾の逆旅を填め、詩を誦して、名を浮たらしめんことを請うのみ。之を勉めよや、之を勉めよや。夫れ古の君子は、天下の蓋うべからざるを知るが故に、之に下り、衆人の先んずべからざるを知るが故に、之に後る。嗟乎叔卿、遣辭は猛健に工、放蕩にして排に安んずること能わざるに似たる者なり。我を以て閭人と為すのみ、我を以て益友と為すのみ。叔卿静かにして之を思え。嗟乎巢父、雌を執り常を守る、吾若に贈る所無し。

かの岑子や薛子でさえも、名士ともてはやされている者たちを月に数十人と招いて、当地の旅館をいつぱいにし、詩を唱和させ、その名をやたら喧伝させている。(これはやりすぎであるが、しかし、君たちは)彼らを見習って努力してほしい。さても、古代の君子は、天下は自分一人だけで統制できるものではないと理解していたので謙虚な態度をとり、一般の人々は自尊心があつて他者にへりくだることが難しいことを知っていたから、彼らに対して一歩下がった態度をとっていたのである(岑子・薛子はその謙虚

さが結果的に浮名に見えるのである)。だというのに張叔卿よ、君はその弁舌を忌憚なく勇猛に揮い、周囲の目など気にも留めずに時勢の流れに沿うことができないようだ。わたしだけが名望ある人間ではないし、益友たりえる人物はほかにもいる。叔卿よ、どうか落ちついて考えてみよ。ああ孔巢父よ、君は柔軟な態度をとって乱を好まぬ。わたしから君に贈る言葉など何もないよ。

岑子・薛子 岑参と薛昶(朱本注に拠る)。岑参は荊州江陵(湖北省)の人。天宝三載(七四四)の進士。辺塞詩人として高適と併称される。薛昶は河中宝鼎(山西省)の人。開元十九年(七三一)に科挙に及第。天宝六載に制挙の風雅古調科に及第。尚書水部郎中となり、給事中を贈られた。王維・杜甫と特に交遊があつた(『全唐詩』作者小伝、及び『詳注』卷十八「寄薛三郎中」題注)。薛昶の詩は『全唐詩』卷二五三に十二首、逸句二首、『全唐詩統補遺』卷三に一首見える。

岑子・薛子が岑参と薛昶であるなら、杜甫が二人の存在を知つた年が「雑述」の制作年に大きく関わってくる。廖立『岑嘉州詩箋注』(中華書局、二〇〇四)所収の岑参年譜に拠れば、杜甫と岑参の交遊は開元二十三年(七三五)、洛陽の地にてはじまったと推測する。薛昶につ

いては、彼の詩に秦望山・西陵（浙江省）・震沢（江蘇省）・丹陽（湖北省）などの地名が出てくるので、開元十九年（七三二）に呉越を遊歴していた杜甫と既に知り合っていたかもしれない。

數十百 八十以上百以下の数、または数の多いことを言う。

誦詩 作詩してそれを朗唱させるといふほどの意味。

浮名 名譽・名声が実際の言動よりも過剰なこと。「浮」

は、ここでは動詞として訓じる。いたずらに名声を上げる意。岑参らの他者と摩擦を生ぜず、おおらかに詩名を高める行為を諧謔的に評している。「礼記」表記篇に「子曰く、『先王諡ちひひなするに尊名を以てし、節するに孝恵を以てす。名の行いに浮うぐるを恥はずればなり。是の故に君子は自ら其の事を大おほにせず、自ら其の功を尚なくせず、以て情に処らんことを求む、行いを過あやまてば率したがわず、以て厚きに処らんことを求む、人の善を彰あわして、人の功を美し、以て賢に下らんことを求む。是の故に君子は自ら卑ひくくすとも、民は之を敬尊す」とある。

耳 請願の気分を表す助辞。「請こし耳」となることが多い。

勉之哉 努め励みたまえ。努力してほしい。「い哉い（いなるかな）」は、一般に感嘆を示すが、「い之哉い（之をくせよや）」は、強い願望や命令等の語気を表し、注意をう

ながす時などに用いられる。

知天下・知眾人の二句 『説苑』敬慎篇に、「君子は天下の蓋おほうべからざるを知るが故に、之に後れ、之に下り、人をして之を慕あわしむ。雌メを執とり下るを持すれば、能く之と争う者莫なし」とある。また、『孔子家語』觀周篇に、「君子は天下の上るべからざるを知るが故に、之に下り、衆人の先まんずべからざるを知るが故に、之に後る。温恭慎徳なれば、人をして之を慕あわしめ、雌メを執とり下るを持すれば、人ひと之に踰こゆる莫なし」とある。「持下」とは、へりくだった態度を保つこと、謙虚であること。この文章は、「浮名」の注に引いた『礼記』の文章とも類似する。

遣辭 言葉遣い。措辞というのと同じ。

猛健 勇猛果敢なこと。後の用例になるが、北宋・黄庭堅の「答王晦之見寄」詩（『全宋詩』卷一〇一八）に、「鄜簡朝に解きて君が詩を得、読み罷やれば涼颺すず炎熱を奪う。嗟呼 晦之の遣詞、猛健に長ず、故に意淡くして孤絶す」とある。「涼颺奪炎熱」・「意淡」などの語から、「猛健」は爽快感を覚えるような直情的で明快なさまを表した語であることをうかがわせる。こうした直情的な言葉は肯定的に捉えることもできるが、思慮深さを欠いた発言として否定的に捉えることもできる。黄庭堅のこ

の詩は、恐らく杜甫の「雑述」を踏襲したものであろう。なので、「雑述」における「猛健」も、勇猛且つ明快という肯定的な面もあるが、配慮を欠いた不用意な発言という否定的なニュアンスも含まれていると解釈できる。

杜甫は、張叔卿の直情的な言葉が相手との間に諍いを起こしやすいことを懸念して「猛健」の語を用いたのではないか。荒井健氏は文学批評に見える「健」字について、『説文解字』でその字義が「伉（相手の意。對抗の派生義がある）」と定義されていることから、「強健・剛健・健全といった意味のうらに、特定の作品の読み手の心にひきおこされる抵抗感のごときものを暗々裡に示唆しているのではあるまいか」（『気』の詩学と『意』の詩学——『滄浪詩話』と『潛溪詩眼』——、『秋風鬼雨』詩に呪われた詩人たち』筑摩書房、一九八二、二四八頁）と述べている。「健」字、高本は「猛」に作る。

安排 自然のなりゆきに身を任せること。張本の細字注に、「序に順いて化に入ること能わざるを謂う」とある。この語は、『莊子』大宗師篇の「排に安んじて化に入れば、乃ち寥に入りて天と一ならん」に基づく。

遣辭工於の二句 底本・仇本・張本・全唐文などは「遣辭工於猛健放蕩、似不能安排者」と句読を切っている。

益友 交遊して有益になる友人。『論語』季氏篇の「益者三友、……直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり」に基づく。

執雌守常 柔軟さと常道（何をするにも欲を出さずに自然であること）を守ること。「執雌」は、柔軟な態度をとりつづけること。『老子』第二十八章に、「其の雄を知り、其の雌を守れば、天下の谿と為る」とある。「守常」は、『淮南子』詮言訓に、「道を積すりて智に任ずる者は必ず危うし、数すを棄すてて才を用うる者は必ず困しむ。……治めんと欲するを以てして乱るる者有るも、未だ常を守るを以てして失する者有らず。……其の分を守り、其の理に循い、之を失うも憂えず、之を得るも喜ばず、故に成る者は為す所に非ず、得る者は求むる所に非ざるなり」とある。

若矣 高本は「若以」に作る。底本は「若以」に作るなら、この二字は次句の冒頭に入れるのであろうと言う。ただ、「矣」字と「以」字とは発音が類似するための混用ではないかと考えられる。裴学海『古書虚字集釈』（中華書局、一九五四）に、『已』猶『矣』也。『已』与『矣』同音。故同義」とあり、「字或作『以』」とある。

(三)

太山冥冥崒以高、泗水潏潏以清。悠悠友生、復何時會于王鎬之京。載飲我濁酒、載呼我爲兄。

太山冥冥として崒しくして以て高く、泗水潏潏として瀾ちて以て清し。悠悠たる友生、復た何れの時にか王鎬の京に會せん。載ち我が濁酒を飲み、載ち我を呼びて兄と爲せ。

泰山は雲を突き抜けて全貌を見通せないくらい険しく高くそびえ、泗水は水底を見通せるくらい清らかな水をたたえてきらきらと流れる。気が置けない友よ、天子の在ましし鎬の都にて再び見えるのは何時のことになるだろうか。さあ、わがにがり酒をあおりたまえ。そして、わたしを見と呼ぶがよい。

太山 山東省にある泰山のこと。錢本・朱本・張本・仇本は「泰山」に作る。

冥冥 視界が雲や塵などに遮られて見通しがきかないさま。また、とても高いさま。

崒 山のけわしいさま。

泗水 山東省泗水県に源を発する川。「泰山」と「泗水」のある山東は、張叔卿と孔巢父に縁のある地。「一」の

張叔卿・孔巢父の注を参照。

潏潏 底の石が見通せるほど水が清らかなさま。

瀾 水の深く満ちるさま。また、水の流れるさま。朱本・

張本・仇本は「瀾」に作る。

悠悠友生 いつまでも心に思つて忘れない友人。「悠悠」

はずつと思いつづけること。

王鎬之京 鎬（今の陝西省西安市長安区）は、西周が都を置いた地。鎬京。ここでは、長安を指す。

載 「すなわち」と訓じ、動作の連続・同時並行を表す。

兄 知人に対して親しみを込めて称する語。仇本の細字注

に「叶音興（叶韻である。興と発音する）」とある。

押韻 清 下平声十四清／生・京・兄 下平声十二庚

※庚・清同用

（宇都宮大学非常勤講師）